

An informational overview on in-vitro allergy testing

第 27 回 George H.Muller 獣医皮膚科年次セミナーレポート

UC.Davis 主催で 2011 年 11 月 3 日～8 日にハワイ島にて開催された上記セミナーに参加しました。
最新情報の Topics をお伝えします。

□ アトピー性皮膚炎の原因抗原の絞り込みには IgE 検査が役立つ

その後の減感作療法にも有用な情報が得られる点で、皮内反応ができない状況下では AD 診断時に推奨。

□ 密かに定着していた急速減感作療法

比較的若い個体は寛解離脱も可能。開始後 2-3 年で 10 頭に 1 頭程度の割合。

□ 変わらぬ基準 食物アレルギーの診断は除去食試験がスタンダード

□ Dr.Ihrke は 除去食に魚由来原材料の療法食は使わない主義・・・ヒスタミン含有量の懸念から

□ 痒みのコントロールにマロピタント (セレニア®) が有効か?

皮膚の痒みの神経伝達物質であるサブスタンス P を阻害する効果が期待できる。

現段階では 10-15% の症例に奏功。今後、適応症例 (心因性?) を絞り込めば有効率が増す可能性も。

□ 初期の扁平上皮癌にベセルナクリーム (イミキモド) が定評を得ていた

週に 2 回、患部周囲に塗布。可逆性の白血球減少症に注意。

□ 難治性皮膚疾患は迷わず皮膚生検を。信頼のおける病理診断医と臨床所見を共有していることが必須条件

□ 皮膚科トリビア

バセット・ハウンドはマラセチアがいても皮膚炎にならず、共生することが多い特殊な犬種である。

更にバセット・ハウンドの皮膚炎は色素沈着に進展しない。

□ 疥癬の診断に耳介-後肢反射試験 (耳縁を擦ると後肢で掻く動作をする) は有効

テキサスで開業の皮膚科専門医 Dr.Daigle の講演より・・・検査の特異度は何と 95% である。

・疥癬の寄生があり、耳病変がある症例の 90% は反射試験で陽性

・疥癬の寄生があり、他の皮膚病変がある症例の 82% も反射試験で陽性

・ただし、疥癬の寄生がなく、他の痒い皮膚疾患でも 6% は反射試験で陽性を示す。

疥癬の寄生があり、皮膚スクラッチ試験で陽性を示す確率が 50% 以下という国際標準に照らしても

皮膚疥癬症は診断的治療が許される皮膚疾患である。

□ Dr.Kirpenstein (ユトレヒト大学 獣医外科教授) の皮膚腫瘍セミナーで得た最新情報

『Villamil ら (ミズリー大学) による 1964 年から 2002 年までの北米における皮膚腫瘍に対する回顧的疫学調査の結果』

総調査頭数 1, 139, 616 頭のうち皮膚腫瘍と診断された頭数は 25, 996 頭で全体の 2. 3%。

上位腫瘍 5 種は

1. 脂肪腫・・・27% 2. 腺腫・・・14% 3. 肥満細胞腫・・・10% 4. 乳頭腫・・・7% 5. 組織球腫・・・5% であった。

上位犬種はボクサーに多く、次いでダックス・フンドだった。年齢は 10-15 歳に多く分布していた。

引用元 : Journal of the American Veterinary Medical Association October 1, 2011, Vol. 239, No. 7, Pages 960-965

□ 猫のシクロスポリンが欧米では認可発売された

5-7mg/kg SID ですでに粟粒性皮膚炎や好酸球性皮膚炎などのアレルギー関連性皮膚炎や落葉状天疱瘡などの自己免疫性疾患

の治療に実績をあげていた。吐くなど消化器症状の予防のコツとして冷凍保存して凍ったまま投与する裏技が披露された。

(猫用のアトピカは液体のため、これを冷凍することは推奨外)